

Question | 戦争

1 —— 「戦争」と聞いた時、

どんなものを思い浮かべますか？

2 —— 小学校〜高校までに学んだ「戦争」について、

印象に残っていること、記憶していることを教えてください。

01 戦争は誰の生活を守るのか

1 戦場でいったい誰が生活を送れるというのだろうか。栄養ある温かいご飯を食べることはできない。爆撃に怯える中ぐっすりと眠ることなどできるはずもない。ところで戦争をはじめた政治家はどんな生活を送っているだろう。体調を崩すことがあってはいけない。温かく栄養たっぷりのご飯を食べてもらおう。国のための正しい判断をしてもらわなければいけない。安全な場所でもよく休んでもらおう。戦争は誰の生活を守るというのだ。

2 帰還兵のPTSDについて扱った授業が印象に残っている。第二次世界大戦の前線で米兵は100人中15〜20人しか武器を使用していなかった。人間は通常、人を殺すことに強烈な抵抗を示すのである。これに危機感を持った米政府は訓練方法を変え、武器使用率は朝鮮戦争で55%に、ベトナム戦争では90%にまで達した。戦場で躊躇なく発砲するようになるには、殺人を正当化するための脱感作、反射的に撃てるようになるための条件づけ、自己嫌悪に陥るのを防ぐための否認防衛機制という3条件がある

が、こうした訓練を受けた兵士は高確率でPTSDを発症したという。訓練で人を殺せるようにはなるが、心を鍛えることはできないことを学んだ。

sakamori / 21歳 / 男性

10

02

地域がどう戦争と関わったのかを学んだ

1 小さい頃は原爆や折り鶴を思い浮かべることが多かったように思います。現在は、これまで語られることが少なかった「慰安婦」、日系人収容、南京事件などを思い浮かべることが多いです。戦争とは国や軍によって多くの人が犠牲にされながら、同時に個人が自らを大きな物語に同一化していくような過程だと考えています。

2 高校の際に自分の住んでいる地域がどのように戦争に関わっていたのかを調べ学習したことがあります。高校の敷地内に昔飛行機工場があり、普段通っている通学路がそこまで資材を運ぶための道であったことを知り衝撃を受けました。この道を通っていた人が、大義のために無駄な犠牲を払われたことに怒りを感じたのを今でも覚えています。

ぐっち / 21歳 / ノンバイナリー

11

—— 戦争

14 戦争に対する想像力が持てない

- 1 自発的に聴取していないものもあるが、日常を生きていて経験者から話を聞くことがないため戦争に対する想像度が低い。土地や資源を奪い合って人が死ぬ行為、ぐらいの想像力しか持てない。
ネット記事で戦争を知るのには難しい。

- 2 学校教育での知識ではないが、小学生の頃家族と沖縄旅行でひめゆり平和祈念資料館に行った際に学徒隊や集団自決の資料を見て子どもながらにその惨さには衝撃を受けた。

シンタロー／24歳／男

15 出来事を覚えるだけの授業だった

- 1 身近に情報に触れているものとしてウクライナ侵攻、ガザへの攻撃、第二次世界大戦。祖父が第二次世界大戦を経験しており、空襲を逃れて移住した体験談の印象。

- 2 授業で戦争が取り扱われた時の印象として、戦争で日本が受けた被害の印象は強くても加害の印象はほとんどない。
また、世界大戦に限らずどんなものでも戦争は人が起こしたものである以上、起こした人や民族や思想が存在するはずなのにそういったことに触れられることがなく、「〇〇年に〇〇戦争が起こった」ということを覚えるように教わることに違和感を覚えていたことが印象に残ってる。

げぢまる／24歳

温度感を持って知る機会はほとんどなかった

1 思い浮かべるのは、声を聞かれずに苦しみ続ける市民と、彼らの失った「日常」と、自らは戦線に立つこともなく経済や権威ばかりを気にする権力者のことだ。小学生の時に読んだ『はだしのゲン』の描写は今でも強烈に残っている。原爆の爆風により溶け落ちた皮膚や身体中に刺さったガラスの破片、腐りかけた体に群がるウジ虫の描写など、目を背けたくなるような光景。また、今日ではSNSで共有される現場の人々の叫びや変わり果てた景色にも触れ続けている。今も昔も地続きで、現実なのだと思われ知らされる。

2 人を殺すことや殺されること、生活を、大切な人を失うことなどを温度感を持って知る機会はずいぶん少なかったように思う。大抵は暗記的作業に意識と時間を費やし、そこで失われゆく命一つひとつの声にはほとんど耳を傾ける機会がなかった。もしくは、私自身がその事象の背景を知ることが意識していなかったのかもしれない。

高校2年の九州への学習旅行にて、水俣病や長崎の原爆などについて当事者の方の話を聞く機会があり、今思えばとても貴重な時間だった。当時の自分は、戦争はどこか遠い話で、自分に関係のあることとは思えずにいた。そんな姿勢のままに当事者の方のお話を伺ったことを今は大変恥ずかしく思うが、そのような姿勢を形作った大きな要因の一つは教育では、とも思わずにはいられない。

あおか／25歳／女

むしろ「学ばなかったこと」が印象深い

1 暗闇と爆撃と飢餓。ひとの命や尊厳を軽んじること。大学生の時に読んだ／観た大岡昇平の小説『野火』と、塚本晋也監督による映画版から受けたイメージが強いです。

2 むしろ「学ばなかったこと」のほうが印象深いかもしれません。わたしは1997年生まれで、中学〜高校時代は安倍政権下で教科書から「慰安婦」の記述が削除されていた世代にあたります。歴史の授業で教わる範囲内のことに加え、『火垂るの墓』や『はだしのゲン』、夏休みにNHKで放送される番組、原民喜の詩などの作品から、「戦争」の被害者、被爆地としての日本という印象を強く持っていました。その後、大学の授業で「慰安婦」問題や「戦争」からやや外れるかもしれませんが、関東大震災時の朝鮮人虐殺について学び、戦時下での日本の残虐な行いをそれまでまったく教えられず、知ろうともせずに生きてきたことに衝撃を受けました。

根岸夢子／26歳／女性

SNSで残虐な光景を目にすることに慣れてしまった

1 近年、私が「戦争」を耳にする、というか目にする媒体は、もっぱらSNS上。ガザのあまりにも残虐な日々が綴られる投稿は、友達が海に遊びに行った投稿や、美味しそうなご飯の投稿に挟まれている。小さな画面の中にある切実な投稿にもこの数ヶ月間で慣れてしまい、結局なにもできない自分の免罪符としていいねを押すような日常がある。もはや戦争をどのように思い浮かべればいいのかわからなくなっている。

2 高校1年生の頃、3年生が沖繩の戦争の歴史を学ぶ修学旅行から帰ってきて、その報告会を行った。そこで先輩たちは、沖繩戦で市民たちが「鬼畜米英」に残虐に殺されることに恐怖し、ガマの中で集団自決するに至った状況を劇にして発表していた。寮生活で寝食とともに過ごしてきた普段の先輩たちとは思えない気迫がありながらも、同時に、沖繩戦下では家族を大切にすることがゆえにお互いを殺し合う状況がリアリティを持って思い起こされ、その劇を見た時の感情を今でもはっきり覚えていてる。

匿名／27歳／男性